

支那美術の歩

題字/北出不二雄

発行
NPO法人 さろんど九谷
〒922-0861
石川県加賀市大聖寺地方町1-10-13
石川県九谷焼美術館内友の会事務局
TEL・FAX 0761-72-6366
<http://www.salon-de-kutani.jp>
発行人 / 古田 章子

石川県九谷焼美術館友の会会報「ふかむらさき」

2023.1.1 第39号

20th Anniversary

2002 → 2022



開館 20 年を振り返って

石川県九谷焼美術館 学芸員 神尾 千絵

「来年の事を言うと鬼が笑う」の逆で、新年早々、開館 20 周年を迎えた昨年 4 月に時間を戻して話をするのは、後退的な雰囲気か否めないのだが、これからの 20 年をどう進んでいくかという前向きなスタートを切るために、しばらくお付き合いいただきたい。

これまで当館では、古九谷、再興九谷はもちろんの事、近代、現代の作家も含め、九谷焼に関する様々なテーマで展覧会を開催してきた。展覧会とひとくちに言っても「企画展」「巡回展」「特別展」「特別企画展」など呼び名がいろいろあり、一般の方にとっては区別がつきにくいのではないだろうか。美術館や博物館によっても様々であり、厳密な使い方が決まっているわけではない。

石川県九谷焼美術館では、独自の調査研究を元に情報を集め、借用を含めた収集によって展示作品を構成する展覧会を「特別展」（または「特別企画展」）としているが、直近の 5 年間で見ても、9 本の特別展を開催し、同時に 9 冊の図録も制作販売している。実はそれ以前は、（一年間の中でも一番学芸員が心血を注ぐ）特別展を開催しても、必ずしも図録を制作してきたわけではなかった。むしろ、開館 4 年目以降、特別展は開催しても図録が無いことのほうが多かった。それは、予算不足や人的スキルに起因していると思われる。

ここ 5 年以内に受付業務に加わったスタッフから、ある日聞かれた。

「今回の展覧会、図録は無いんですか」

その時開催していた展覧会は、展示している作品がすべて館の所蔵品による企画展であり、図録を制作していなかったのだが、そのスタッフにしてみれば「展覧会」＝「図録がある」のが当たり前だったのである。

「残念ながら今回の展覧会は図録を制作していません。」と答えた私は次の瞬間、妙なことに満足感に近い感情を抱いていた。これは私達にとってはうれしい反応だったのである。つまりこの反応は、「ある程度の内容の展覧会には図録がつきもの」という概念を持っているということであり、もっと言えば、図録の発行を期待されているという事になる。

展示されている作品が館蔵品であろうが、他所から借りてきた作品であろうが観る立場の人にとってはそれほど大きな問題ではない。展覧会開催にどれだけの労力と経費がかかっているのかは、知ったこっちゃない話であり、それでいいと思う。学芸員の業務は裏方が大半である。

では、なぜここ 5 年間は特別展の図録を制作し続けられたのか。今振り返ってみると、なぜそれ以前は図録を作らなかったのかとすら思う。「予算が無くて図録が作れない」は「時間が無いから勉強ができない」と言うのと同

じだと思っている。美術館の懐具合が5年前を境に劇的に良くなった訳ではもちろんない。裏の話をすれば、予算は勝手に割り当てられるはずはなく、地道な積み上げといくつものハードルを超えてようやく確保される（されない場合もある）。当館は美術館の規模に比して驚くぐらいスタッフの人数が少なく、予算確保の交渉もその業務に含まれている。

答えは「特別展を開催し、図録を作ろうと思ったから」である。

人的スキルには様々な要素があるが、やるかやらないかの「気持ち」もスキルの中には含まれる。現在の石川県九谷焼美術館を構成するすべての人的スキルが同じベクトルを持っていると思う。すなわち、九谷焼をどう発信するか、魅力をどう伝えるかを含め、「館を訪れた方に満足して帰ってもらいたい」という思いがすべてのスタッフの

中にある(多分)。同じ方向に何本もの矢印が向かっていれば到達点には早く着くことになり、逆に反対の方向に向かう矢が1本でもあれば、到達点まで行く力にとってはマイナスになってしまう。

筆者は、この美術館に5年間在籍したのみで、開館後20年を越えた美術館からすれば新参者の域におり、20年間を振り返って偉そうな事を言える立場にはないことを承知の上で紙面を汚しているのだが、少なくとも現在は、これまでの石川県九谷焼美術館の歴史の中でも最高の人的スキルを持ったスタッフによって、歩んでいることは間違いないだろう。

今後もし引き続き、皆様のお力添え、応援を受けながらこの先の20年、50年、100年を迎えられることを切に願うものである。

特別展「古九谷の多様性とハレ」の意義

石川県九谷焼美術館 学芸員 中越 康介

はじめに

加賀の地元から出されてきた皮相的見解、折衷案、風見鶏的な言動の連続により、「古九谷は有田産である」との、もはや通説となってしまうような現実を覆すことは出来ずに、2018年まで来た。開館20周年にふさわしい展覧会は「何か」と考えたとき、やはり「古九谷」以上の対象はない。地元住民だけでなく、全国的に議論が絶えな

い「古九谷産地論争」の終結を目指すため、2018年以降、我々は死力を尽くす決意をした。



二人の偉人

満を持して開幕した特別展「古九谷の多様性とハレ」においては、日本における陶磁器研究の第一人者であり、東京国立博物館における陶磁器最高責任者である今井敦氏をお招きし、ご講演を賜り、展覧図録には古九谷研究史上画期的で、道標ともなる原稿をちょうだいした。

日本における美術業界の牽引者であり、美術商の頂点に君臨する繭山龍泉堂代表の川島公之氏をお招きし、陶磁器を扱う第一人者から観た古九谷について、ご講演を賜った。その内容には、誰もが脱帽したことと想像する。

今回、日本における最高の研究者と美術商に古九谷を語っていただけたことは、これから先の九谷焼研究の推進に対する、これ以上ない強い原動力となった。

2018年以降の当館発行の書籍

2022年度末には紀要第6号が発刊されるが、これにより2018年以降の当館の発行図録、紀要の合計数は15冊を数え



ることになる。5年間で15冊を発行できる未来が来ることなど、我武者羅ではじめた当初では予想ができなかった。現実の当館の人的、予算的環境を知っている人がいるとすれば、信じられないのではないかと想像する。これも、少数精鋭、一人一人の専門性とやる気みなぎる情熱とが結晶した賜物である。これらの発行物のいずれもが古九谷産地論争に対峙し、「古九谷は加賀産である」ことの傍証を発出してきた。

おわりに

ここまでの石川県九谷焼美術館の道のりを振り返れば、物理的にも精神的にも、水平道は一か所もなかった。客観的にみて、特に2018年以降の発展には目覚ましいものがあり、快挙の連続であった。我々は少人数で常に全力を尽くし、予算がなくても知恵を絞り、工夫を凝らして、常に前を向いてきた。「泥水」を飲んできたからこそ真水のうまさ身に染み、「冷や飯」は味がより顕著となりおいしい、と強気で言おうではないか。「文化」を扱う部門は組織体制上の理解には乏しい傾向があるが、陰で応援していただいた多くの方々のおかげで、心が折れる寸前に、何度も何度も立ち上がってきた。石川県九谷焼美術館の職員、館と表裏一体のサポート団体「さろんど九谷」の職員とが一丸となって、ここまで来た。一日を一生の縮図と考え、「やり残したことはない」といえる時間を積み重ねてきた。誰一人、思い残すことはないだろう。

行事報告フォトレ

ご協力・ご参加いただきました



九谷桜花茶会 4/10
表千家中村社中による茶会



加賀獅子舞イベント

10/29 大聖寺関栄による獅子舞演舞

10/30 稲村行貞氏 (全国の獅子舞を研究するフリーライター)、神尾千絵氏 (当館学芸員)によるトークイベント



煎茶花月菴流体験模擬茶会 7/24・8/7・9/11・10/16・11/27
煎茶花月菴流香草会による全5回の体験模擬茶会

皆様ありがとうございました。



ナイトコンサート 10/21
オーケストラアンサンブル金沢 コンサートマスター アビゲイル・ヤング氏



愛でる・育てる丸谷焼 10/6・10/20 全2回



体験「丸谷焼と音遊び」 ((公財)あくるめ財団協賛事業) 7/31・8/21
丸谷焼の成形した笛に子どもたちが絵付けを施し、焼成後その笛でリズムを楽しむ「音遊び」

「自然の中から一番美しい姿を探し出すには修練がいる」

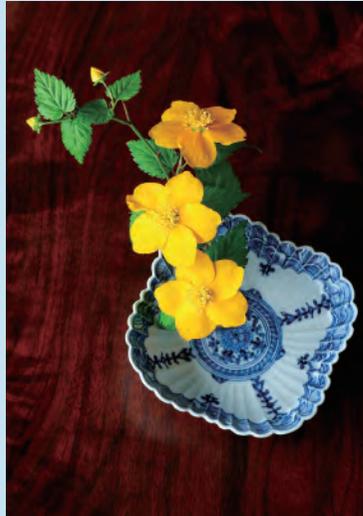
故北出不二雄先生からそのように教えられました。私が北陸中日新聞加賀通信局で記者をしていた2007年8月下旬、加賀市大聖寺下屋敷町の実性院で、雨後の緑鮮やかな萩のスケッチをする北出先生を取材した時のことです。当時87歳。大病を患い作陶が思うようにできなかった時期をへて、あらためて創作の思いをうかがいました。答えはシンプル。「努力して少しずつうまくなりた。それがプロでしょう」と。その姿勢は「模様から模様を作らず」という富本憲吉氏の薫陶を受けた若きころのまま。萩の姿から選び抜いた線をスケッチブックに刻み付けるように描いておられました。

こうしていま振り返ると、加賀では北出先生の釘彫り模様の彩釉花器をはじめ、新旧数々の名品を間近で鑑賞できる幸せに恵まれました。自然の造形から作家の真摯な観察眼で抽出された線の美が、その作品を通して認識されることで、私たちはあらためて自然の美を再発見できるのかもしれませんが。何を美として選び、自分のものとするべきかを、北大路魯山人は「勘所」と言いました。

九谷焼を代表する陶芸家の一方、元金沢美術工芸大学長という教育者の北出先生は、私に美しさとは何かを問い続ける心を教えてくれたように思います。絵を描いたり、もちろん絵付けをしたりするわけでもありませんが、4年ほど前からお花をいけることを楽しんでいます。「この花はどの向きが最も美しいか」「魅力



見附正康作品と



山本長左作品と

的な線を生かすにはどうすれば」などと自問自答をしながら。そのお花の写真SNSのInstagramで毎日発信していますので、よろしければご笑覧を。



▲詳細はこちら

▶ 石川県九谷焼美術館 展覧会のごあんない

特別展 開館20周年記念 古九谷の多様性とハレ

～ 令和5年 2/12日

古九谷の小皿・中皿には、人を惹きつけてやまない多様性に富んだ美しさがある。本展では、古九谷の皿の用途としてハレ（非日常）を指摘し、古九谷の権威を再構築させるとともに、小品や組物にこそある魅力に迫る。

企画展 第12回 九谷焼伝統工芸士会作品展

令和5年 2/18日～ 3/21日(火・祝)

古九谷以来の伝統を受け継ぐ九谷焼の伝統工芸士（経済産業省認定）でつくる「九谷焼伝統工芸士会」の作品展。（企画展示室のみ無料）

▶ さろんど九谷 行事のご案内

九谷桜花茶会

令和5年 4/2日 10:00～16:00

会場：石川県九谷焼美術館2階五彩庵

席主：煎茶花月菴流石川支部

定員：80名 茶券：1,000円（事前申込制）
半券提示にて美術館入館無料（当日限り）

新型コロナウイルス感染拡大状況によっては開催が中止となる場合があります。



▲詳細はこちら

友の会会員を募集しています

■ 個人会員 3,000円…個人単位で入会

■ 家族会員 4,500円…家族の代表者名で入会

※ただしご入会家族のお名前を事前登録させていただきます。
資料等の配布は一人分のみとさせていただきます。

会員特典

- ・ 石川県九谷焼美術館の入館無料
- ・ 広報誌「ふかむらさき」郵送
- ・ 毎月行事案内郵送
- ・ 会員限定行事への参加およびその他主催行事への優先参加、会員割引など（視察研修旅行、ナイトコンサートなど）
- ・ 石川県立美術館コレクション展などの観覧料が団体料金

▶ お問い合わせ・連絡先

石川県加賀市大聖寺地方町1-10-13 石川県九谷焼美術館内友の会事務局
TEL・FAX 0761-72-6366 E-mail: info@salon-de-kutani.jp